北海道教育大学学術リポジトリ
Hokkaido University of Education Repository
国立大学法人 北海道教育大学
HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

母親の養育態度と幼児の自己制御機能及び社会的行動との関係について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-03-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 戸田, 須恵子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00008343

釧路論集 ー北海道教育大学釧路校研究紀要ー 第38号(平成18年)
Kushiro Ronshu, - Journal of Hokkaido University of Education at Kushiro - No. 38(2006): 59-69.

母親の養育態度と幼児の自己制御機能及び社会的行動との関係について

戸 田 須恵子
北海道教育大学釧路校教育心理学研究室

The relaitonshiip between mothers' parenting practices and children's self-regulation and social behaviors

Sueko TODA
Department of School Educational psychology, Kushiro Campus,
Hokkaido University of Education

要 旨

母親の養育態度と幼児の自己制御機能及び社会的行動との関係を検討することを目的に、幼稚園に通っている母親を対象に研究への協力を求め、176名（男児86名，女児90名）の母親から研究への参加協力を得た。質問紙は、幼稚園を通して母親に配布された。質問紙は50項目からなり、因子分析の結果、７因子が抽出された（受容／子ども中心主義、統制／専制的、一貫性のないしつけ、服従的、過保護、甘やかし、放任)。幼児の自己制御機能及び社会的行動に関しては、幼稚園の先生に評価してもらった。自己制御機能については、因子分析の結果、自己主張と自己抑制の２因子が抽出され、社会的行動については因子分析の結果、思いやり行動と攻撃的行動の２因子が抽出された。母親の養育態度と幼児の制御機能との関係では、自己主張と母親の養育態度、服従的、過保護、甘やかしに負の関係が認められた。又、思いやり行動と過保護と負の関係が認められた。さらに、幼児の制御機能や社会的行動に影響を及ぼす母親の養育態度について重回帰分析を行ったところ、幼児の自己主張にマイナスの影響を与えていたのは、母親の養育態度の中で、過保護と甘やかしであった。又、思いやり行動に影響を与えている養育態度は、過保護であった。これらの結果は、母親が幼児を育てる過程で、自己主張や思いやり行動を育てるには、過保護や甘やかしといった行き過ぎた母親の養育行動がマイナスの影響を及ぼしていることを示唆している。どのような育て方をすれば、幼児の自己主張や向社会的行動が育てられるのか、さらに継続して検討していくことが必要である。

問 題

子どもの社会的行動に影響を与える要因の一つとして母親の養育態度が挙げられ、どのようように影響を与えているか多くの研究がなされてきた(Baumrind, 1966; Grusec & Goodnow, 1994; Ladd & Sieur, 1995; Lewis, 1981; Putallaz & Heflin, 1990)。Belsky (1984) は、親の養育態度がどのような要因と関係しながら養育態度が決定されるのかプロセスモデルを提示している。しかし、彼のこのモデルは、親の養育態度と子どもの発達やコンピテンスと関係があることは示しているが、具体的にどのような側面と関係があるかは示していない。母親の養育態度の研究は、養育態度をどのような変数と関連して見るかでその分類が異なる。一般的には、子どものパーソナリティとの関係で知られているのが、サイモンズの拒否、保護、支配、服従の４軸の養育態度で、宮城は、この４軸をさらに発展させて、８つの養育態度と子どものパーソナリティとの関係を示している (1960)。近年になって子どもの社会的行動との関係で見られているのが、Baumrindが開発した母親の統制と応答性の二つの軸を中心にした４つのタイプである(1981)。即ち、統制が高く、応答性（温かさ）も高い権威型、統制は高いが応答性が低い権威主義型、統制が低く、応答性が高い過保護型、統制も応答性も低い無関心型であるが、現在は、権威型、権威主義型、許容型（過保護と無関心を合わせた型）の３つのタイプが利用されている。Baumrindは、統制が権威的養育態度と他の養育態度を区別する鍵であると考えているが、この統制がどちらの統制かで議論がある。Lewis (1981) はBaumrindの考えているのは、親自身のコ

ントロールではなく、親の子どもに対するコントロールであるとし、子どもの社会的行動との関係を議論するのに問題があると批判している。いずれにしても、多くの研究は、この３つの養育態度と社会的行動や学力と正の相関があることを報告している(Baumrind, 1991; Lamborn, Mounts, Steinberg & Dornbusch, 1991; Steinberg, Elmer & Mounts, 1989)。このBaumrindが開発した養育態度の型は、青年期の子どもを対象に面接で得られたデータを基礎にした研究である。Robinson, Mandleco, Olsen & Hart（1995）は、この研究方法では時間と手間がかかりすぎることと、対象が青年期の子どもということから、幼児期の親の養育態度として利用するため、Blockの質問紙から80項目と過去に利用されたいろいろな質問紙から53項目を利用して３つの養育態度が測定される質問紙を開発し、最終的には養育スタイルを測定する尺度として62項目からなる質問紙を作成した。この３つの養育スタイルと子どもの社会的行動との関係の研究では、Putallaz & Heflinが母親の養育態度と拒否される子どもの行動との関係を研究し、仲間から拒否される行動の一つである攻撃的行動は、権威主義的な母親の養育態度からの影響が強いことを報告している。（1990）。

日本の親の養育態度に関する研究は、拒否、保護、支配、服従といった軸を中心にした研究が殆どで、権威的、権威主義的、許容的な養育態度についての研究は殆どない（戸田，1998a，1998b，1999a)。戸田は、親の養育態度と幼児の社会的行動、特に攻撃的行動との関係を研究し、母親の権威主義的養育態度と幼児の攻撃的行動とは関係がなかったが、父親の権威的な養育態度、特に説得的な養育態度は、幼児の園での破壊的行動やいじめと関係があったことを報告している。(1998a，1998b)。さらに、母親の専制的な養育態度や父親の命令的、専制的養育態度は自己主張と負の関係があったことを報告している。又、国際比較研究では親の養育態度と攻撃的行動との間に有意な関係があったことを報告している(Putallaz & Heflin, 1990; Russell & Russell, 1996)。鈴木・松田・永田・植村は、養育態度の尺度構成について検討している(1985)。彼らはSchaefer(1965)に基づいて研究した小嶋の研究から（1969）10因子を採択して検討している。その結果、受容性、子ども中心主義、子どもの私有化、拒否、統制、敵意の含まれた統制、一貫性のないしつけ、ルーズなしつけ、接触回避、放任の10因子を抽出している。しかし、彼らの養育態度質問紙は、検討のみにとどまりそれがどのような変数と関係があるのかは研究していない。そこで、本研究では、鈴木等が作成した項目を使用して、養育態度と幼児の制御機能及び社会的行動との関係を検討することとした。

幼児の自己主張や自己抑制の研究は、自己の発達という側面から研究されている（柏木，1983)。柏木は、自己の発達を次のように述べている。２歳頃は、自分の所有物などに関して自己の感覚を持っており、２歳半ごろは、他者との関係というより、自己中心的で自分の思い通りにしようとするところでの自己主張である。３歳ごろになって、仲間との共同遊びができるようになり、順番も待てるようになる。このような仲間との関係の発達は自己についての意識の深みと広がりを示すものであると述べている。従って仲間との協同遊びができるレベルでの自己主張を本当の自己主張であると考えているようである。この考えに基づくと、自己主張は、３歳ごろから発達していくと考えることができる。そのような仲間との関係の中で、待てる行動、我慢する行動は自己抑制行動の一つとして考えてよいだろう。自己統制、自己抑制、自己制御ということばは、研究者によって異なるが意味としては同じ意味を示している。Koppによると(1982)、乳児期の自己制御(Self regulation)の発達は、幼児期には自己コントロールへと発達することを述べている。このように自己抑制はいろいろな言葉が使用されている。自己制御の発達に関しては、柏木が自己の発達の一部として述べている（1988)。柏木は、幼児期の自己主張と自己抑制の発達を研究し、自己抑制については、性差が見られ、女児の方が自己抑制が高かったことを報告している。又、森下（2002）は、自己主張と自己制御機能について園と家庭で違いがあるかどうかを横断的と縦断的側面から検討し、自己制御は、横断的データによれば、年中から年長にかけて発達するのに対して、縦断的データの結果は、年長では発達しなかったことを報告している。自己主張に対しても、横断的データでは３歳以降は発達しないという結果を示したが、縦断的データでは３歳以降も発達するという結果を報告している。このような結果は、縦断的研究の重要性を示唆していると言える。さらに、園と家庭との比較では、自己制御は、園では女児の方が高かったのに対して、家庭では差がみられなかったことを報告している。本研究では、自己主張、自己制御に関する質問紙は森下の質問紙を使用することにした。

幼児の社会的行動の研究として、向社会的行動、攻撃的行動、引っ込み思案などの行動が研究され、これらの社会的行動は、仲間関係や母親の養育態度との関係で研究されている（戸田，1999b)。向社会的行動は思いやり行動とも言われ、見返りを期待しない人のためになる行動と定義されている。向社会的行動には、愛他行動、援助行動、寄付行動、分配行動、共感性など様々な肯定的行動が含まれている。向社会的行動の研究と言えばEisenbergが最もよく知られている。一般に向社会的行動の高い幼児は、共感性や他者理解行動も高いと言われている。森下は、母親の養育態度と幼児の向社会的行動及び攻撃的行動との関係を研究し（1998)、母親の養育態度については鈴木ら（1985）の研究から受容性と統制因子のみを採択し使用している。結果は、思いやり行動に関しては、４歳の男児の得点が他の群より低く、攻撃的行動については男女とも５歳になると低下すること、性差が認められ、男児の方が攻撃性が高いことを報告している。又、思いやり行動は４歳では女児の方

が得点が高く、５歳では性差が認められなかったことを報告している。しかし、Eisenberg & Fabes (1998) は、向社会的行動の内容がどのようなものかで性差は異なることを報告している。さらに、森下は、母親の受容性が高いほど思いやり行動の得点が高かったこと、特に、５歳児では、思いやり得点が低い幼児の母親は力中心のストラテジーの得点が高かったことなどの結果から、幼児は、母親行動をモデリングしながら社会的行動を発達させていることを報告している。

以上の先行研究から、本研究は、母親の養育スタイルと幼児の自己制御機能及び社会的行動との関係を検討することを目的とする。社会的行動は、特に、向社会的行動と攻撃的行動に焦点を当てて検討する。

方　法

被験者：釧路市内の幼稚園を通して、幼児を持っている母親へ本研究への参加協力を依頼したところ、176名（男児86名、女児90名）の母子から協力が得られた。幼児の年齢は、幼稚園でのクラスで分類した。年少組51名、年中組68名、年長組57名であった。

手続き：母親への質問紙は、幼稚園に通園している幼児を通して母親へ配布された。質問紙は一週間後に回収した。又、幼児の社会的行動については、母親からの回答があった幼児について担任の先生に評定してもらった。

質問紙：質問紙は母親用の養育態度質問紙と先生用の幼児の制御機能及び社会的行動に関する質問紙と２種類ある。母親の養育態度に関する質問紙は、50項目から構成されている。回答は、１．全くそうでない、２．あまりそうでない、３．どちらともいえない、４．まあまあそうである、５．そうであるの５段階評定である。

幼児の行動に関する質問紙は、自己制御機能に関する質問紙と社会的行動に関する質問紙と２部ある。自己制御機能に関する質問紙は29項目からなり、回答は、１．そうではない、２．ややそうである、３．かなりそうである、４．非常にそうであるの４段階評定である。社会的行動の思いやりと攻撃的行動に関する質問紙は16項目からなり、回答は、１．全然ない、２．たまにある、３．ときどきある、４．よくある、５．非常によくあるの５段階評定になっている。

データ整理と信頼性：各質問紙は因子分析（主因子分析、バリマックス回転）を行った。母親の養育態度については７因子を抽出し、幼児の制御機能及び社会的行動についてはそれぞれ２因子を抽出した。分析の詳細は結果と考察で述べる。母親の養育態度の因子のアルファ係数はTable1に示してある。第７因子のアルファ係数が0.34と低く項目間の整合性があるとは言えないがそのまま入れて分析している。又、幼児の自己制御機能及び社会的行動のアルファ係数は、Table６に示してある。Table６から分かるように、自己制御機能及び社会的行動については整合性は高かった。

結果と考察

母親の養育態度について

母親の養育態度については、質問項目50項目を因子分析した（主因子分析、バリマックス回転）。15因子が抽出されたが、項目間の整合性が見られないため、再度因子分析を行い、固定値1.6以上で７因子を抽出した。寄与率は47%であった。第１因子は14項目からなり、子どもと楽しい時間を過ごす、子どもが喜びそうなことをいつも考えているといった項目が含まれていたので、「受容／子ども中心主義」と命名した。第２因子は10項目からなり、子どもが言いつけどおりするまで、子どもを責めたてる、子どもの行儀をよくするために罰を与えるのは正しいことだと思うといった項目が含まれていたので、「統制／専制的」と命名した。第３因子は７項目からなり、決まりを守るようにと子どもに強くいう日もあれば、忘れている日もあるといった一貫性のない養育態度項目が含まれていたので「一貫性のないしつけ」と命名した。第４因子は６項目から構成され、子どもが望むままに自由にさせている、子どもに頑張られて子どもの考えどおりになりやすいといった子どもに服従する項目が含まれていたので「服従的」と命名した。第５因子は７項目からなり、子どもに何か起こるといけないから、あまりよそに行かさせないようにしている、子どもが長い時間外で過ごすことを認めないといった親自身の関心の範囲内で子どもの行動を制限している項目が含まれていたので「過保護」と命名した。第６因子は３項目からなり、子どもが物を欲しがるとだめと言えない、子どもが悪いことをしてもあまりとがめだてしないといった子どもを甘やかす態度の見られる項目が含まれていたので「甘やかし」と命名した。第７因子は３項目からなり、やってはいけないと私が言ったことを子どもがしていても黙ってみているところがあるといった項目から構成されていたので「放任」と命名した。因子負荷量と各項目得点はTable２に示してある。負荷量でマイナス記号がついているのは逆転項目である（項目09, 19, 25, 29, 39, 44, 49）。Table１とTable

Table１　母親の養育態度の因子得点

因　子　名	得点(SD)	α係数
第１因子　受容／子ども中心主義	4.20 (.48)	.86
第２因子　統制／専制的	2.61 (.60)	.83
第３因子　一貫性のないしつけ	2.04 (.55)	.75
第４因子　服 従 的	2.03 (.52)	.68
第５因子　過保護	2.67 (.57)	.61
第６因子　甘やかし	1.75 (.53)	.53
第７因子　放　任	2.72 (.59)	.34

Table 2　母親の養育態度の因子分析結果

因子	項目	負荷量	得点(SD)	項　　目
1	41	.712	4.23(.72)	家で子どもと楽しい時間を過ごす
	31	.710	4.60(.64)	子どもが怖がっているときには安心させてやる
	02	.703	4.05(.73)	子どもが喜びそうにことをいつも考えている
	29	-.701	4.18(.86)	＊子どもといろんなことを一緒にすることは、あまりない
	19	-.661	4.23(.80)	＊子どもと一緒に物事をするのは、あまり好きではない
	12	.623	3.94(.86)	子どものことに十分気を配っている
	09	-.605	4.55(.71)	＊子どもとあまり話をしないほうだ
	01	.553	3.85(.80)	子どもの悩みや心配事を理解している
	32	.551	4.59(.70)	自分にとって、子どもが何よりも大切だ
	44	-.509	4.14(.87)	＊子どもを邪魔者扱いにすることがよくある
	22	.508	3.85(.99)	自分のことは我慢しても、子どものためにしてやることがよくある
	11	.505	4.10(.93)	子どもと一緒に、外出するのが好きだ
	39	-.476	4.17(.90)	＊子どもを笑いものにしてしまうことがある
	49	-.367	4.38(.89)	＊もう少し違った子どもだったらよいのにと思うことがある
2	36	.759	2.51(.99)	子どもが言いつけどおりするまで、子どもを責めたてる
	35	.730	2.39(.97)	子どもの行儀をよくするために罰を与えるのは正しいことだと思う
	45	.678	2.24(.98)	子どもを自分の言いつけどおりに従わせている
	05	.624	2.06(.83)	子どもに対しては、きまりをたくさんつくり、それをやかましく言わなければいけないと思う
	16	.610	3.47(.94)	子どもがすべきことをちゃんとしてしまうまで、何回も指示する
	26	.595	2.49(.88)	子どもにはできるだけ私の考えどおりにさせたい
	34	.582	2.93(1.05)	子どもが私を困らせるようなことをするので、よくカーッとなる
	06	.564	2.72(.91)	子どもに、何事もどんなふうにしたらよいかを、ことこまかにいいきかせる
	15	.562	2.56(1.07)	子どものした悪いことは何らかのかたちで罰を与えるべきだと思う
	24	.392	2.73(.89)	たいていの場合、子どもがしたことに口を出す
3	47	.731	2.30(.92)	決まりを守るようにと、子どもに強くいう日もあれば、忘れている日もある
	07	.667	2.71(1.05)	子どもが同じことをしても、時によって叱ったり、放っておいたりしてしまう
	38	.661	1.80(.77)	言いつけに対して子どもが不平を言うと、言いつけを取りやめることがある
	27	.622	2.46(.99)	そのときの気分しだいで、子どもに決まりを押し通したり、ゆるめたりする
	37	.484	1.73(.71)	子どものために作った決まりを、よく変える
	08	.453	1.89(.78)	子どものいいなりになるほうだ
	14	.380	1.42(.80)	子どもなんかいないほうがよかった、と思うことがある
4	20	.720	2.43(1.00)	子どもが望むままに自由にさせている
	48	.624	2.02(.85)	子どもに頑張られて、子どもの考えどおりになりやすい
	30	.611	1.76(.80)	子どもの行きたい所へは何も聞かずに行かせてやる
	50	.607	2.69(.99)	子どものしたいことは何でもさせている
	10	.545	2.14(.93)	子どもの好きなように、いつでも外出させる
	40	.471	1.15(.38)	夜でも、子どもが行きたいときは、いつでも外出させてやる
5	03	.677	2.37(1.10)	子どもに何か起こるといけないから、あまりよそに行かさせないようにしている
	33	.607	2.40(1.00)	子どもが長い時間、外で過ごすことを認めない
	23	.529	3.54(1.16)	子どもがいないときは、子どものことが心配になる
	43	.529	2.58(1.04)	私がついていないと、子どもは自分のことをちゃんとできないのではないかと心配である
	13	.454	2.92(1.13)	子どもが大きくなって、自分と過ごす時間が少なくなったのを残念に思う
	04	.382	1.40(.61)	子どもの考えは、ばかげたもののように思える
	42	.301	3.47(1.11)	私の食生活は子どもを中心に動いている
6	18	.573	1.54(.75)	子どもが物を欲しがると、だめと言えない
	28	.507	1.69(.75)	子どもが悪いことをしても、あまりとがめだてしない
	46	.429	2.02(.70)	子どもに自分で物事を決めさせることはあまりない
7	17	.707	1.84(.82)	やってはいけないと私が言ったことを子どもがしていても、黙ってみていることがある
	25	-.612	2.02(.89)	＊子どもが外から時間通り帰ってくるようにいつもさせている
	21	.391	4.30(.98)	子どもにたびたび話しかける

＊は逆転項目である。

２を合わせてみると、第１因子の因子得点は4.20と高く、各項目得点を見てもいずれも高い。母親は子どもを受容していると考えていることが分かる。第２因子では、因子得点は2.61と真ん中あたりだが、各項目得点を見ると、項目16「子どもがすべきことをちゃんとしてしまうまで、何回も指示する」の得点が3.47とかなり高い傾向にあり、親のしつけの厳しさが現れている。因子内の殆どの項目で最高得点５をつけている親もおり、平均以上にしつけの厳しい親がいることがわかる。第３因子は2.04と比較的得点は低く、一貫性のないしつけはあまり行っていないと言える。第４因子の得点は2.03と低く、母親は子どもにそれほど服従的ではないと言える。第５因子の得点は2.67とやや低い傾向が見られるが、各項目の得点を見ると、項目23「子どもがいないときは、子どものことが心配になる」（3.54点）と項目42「私の食生活は子どもを中心に動いている」（3.47点）の得点がやや高い。子どもをポシティブに受け入れていると考えられるが、心配の度合いが強すぎると、母親自身が不安になり、子どもの行動を制限してしまうといった問題に繋がる可能性があると言えよう。例えば、子どもが幼稚園に行っていても、心配でするべき仕事が進まないといった度合いまで心配するなどである。第６因子の因子得点は1.75と低く、全体的に子どもを甘やかしてはいない様子がうかがえる。第７因子は、「放任」と命名したが、α係数が0.34と項目間の整合性が低く出ているように、例えば、項目21「子どもにたびたび話しかける」といった放任の因子には含められないような項目が含まれているので、因子として問題がある。

次に、これらの因子間の相関を見たところ、いくつかの有意な関係が認められた（Table３）。受容／子ども中心主義因子と一貫性のないしつけ因子及び甘やかし因子と負の相関が認められ、過保護因子とは正の相関が認められた。過保護因子の項目を見ると、子どもへの心配や気遣いから子どもを守ろうとする項目が多く見られ、第１因子と正の関係が見られたことから、母親がこれらの項目をポシティブに評価していることが分かる。又、統制／専制的因子と一貫性のないしつけ及び過保護因子と正の相関が認められた。一貫性のないしつけ因子は、服従的因子、甘やかし因子、放任因子といずれも正の相関が認められた。過保護因子は甘やかし因子と正の相関が認められ、甘やかし因子は放任因子と正の相関が認められた。このように、第２因子から第７因子までは多くの因子間で相互に正の関係があり、これらの養育態度因子は、ネガティブな要素を持っている因子と考えてよいだろう。

Table３　母親の養育態度の因子間相関

養育態度因子	1	2	3	4	5	6	7
1．受容／子ども中心主義			-.399***		.271***	-.183*	
2．統制／専制的			.329***		.263***		
3．一貫性のないしつけ				.182*		.353***	.232**
4．服従的						.415***	
5．過保護							
6．甘やかし							.312***
7．放　任							

* p<.05　** p<.01　*** p<.001

因子得点を年齢と性別で見たのがFigure１-Figure７である。

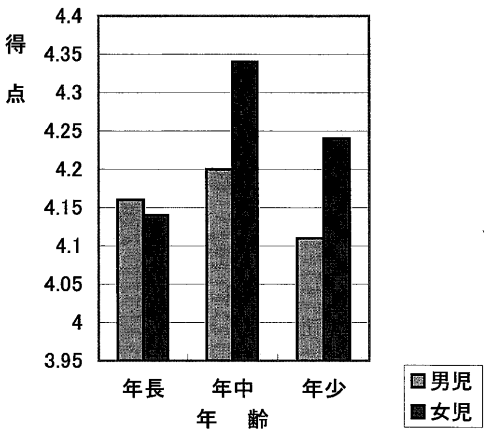

Figure１　母親の養育態度因子得点
－受容／子ども中心主義－

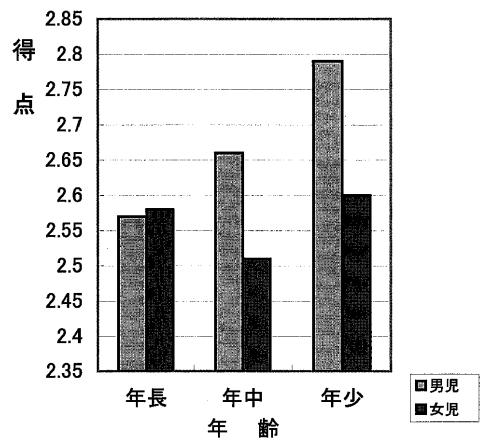

Figure２　母親の養育態度因子得点
－統制／専制的－

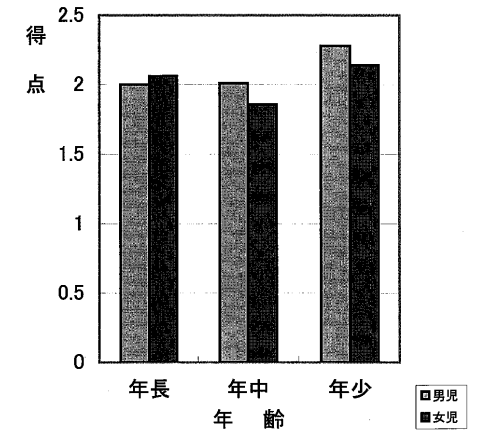

Figure３　母親の養育態度因子得点
－一貫性のないしつけ－

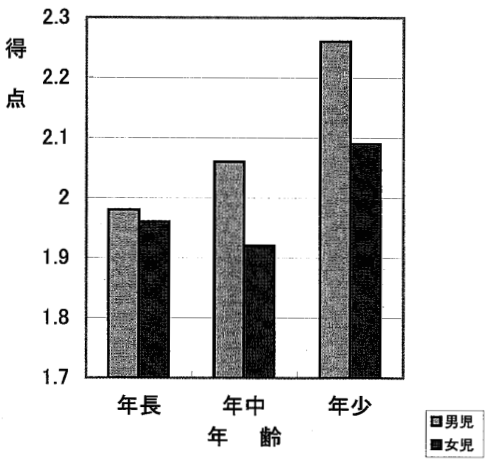

Figure 4　母親の養育態度因子得点
－服従的－

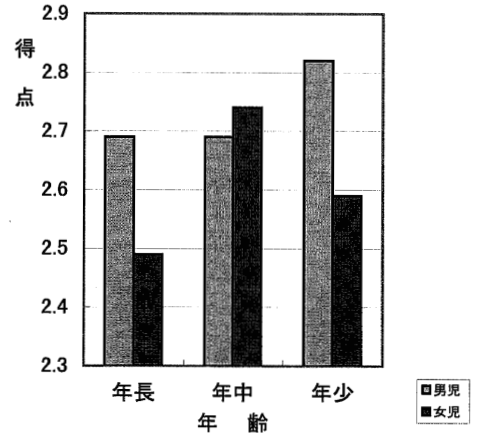

Figure 5　母親の養育態度因子得点
－過保護－

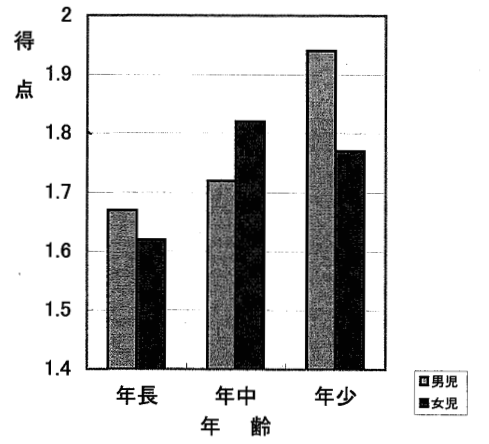

Figure 6　母親の養育態度因子得点
－甘やかし－

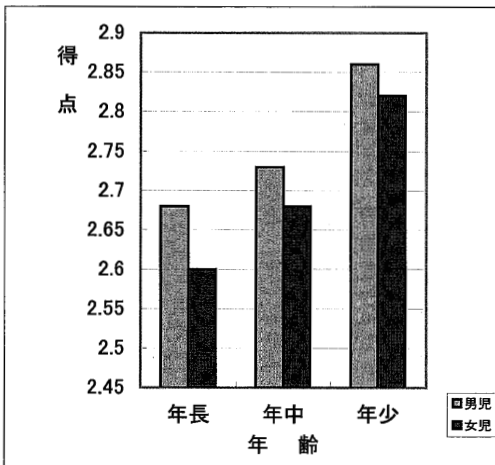

Figure 7　母親の養育態度因子得点
－放任－

これらの因子得点が年齢や性別で差があるかどうか、3（年齢）x 2（性別）の二要因分散分析を行った。その結果、第３因子「一貫性のないしつけ」で年齢の主効果が認められた（F (2,170) ＝3.69, p＜.027)。そこで最小有意差（LSD）による多重比較を行った結果、年中と年少の間で有意差が認められた（Figure 3，年長 2.03, 年中 1.93, 年少 2.20)。交互作用は認められなかった。年少組の母親の方が年中組の母親よりしつけにおいて一貫性がないことが明らかになった。又、第４因子「服従的」において年齢で有意傾向が認められた（F (2,170) ＝2.57, p＜.08)。しかし、多重比較の結果、どの年齢間にも有意差は認められなかった。得点を見ると、年長と年中の得点は殆ど差はないが年少ではやや高かった（Figure 4，年長1.97, 年中 1.99, 年少 2.16)。一貫性のなさや服従的な養育態度にやや差が見られたという結果は、年齢が小さいほど母親は、子どものしつけには甘い傾向が見られることが示唆される。性差及び交互作用はすべての因子に有意差は認められなかった。以上の結果から母親は、年少にはやや甘いしつけが見られるが、子どもを受容するという点についてはそれほど年齢や性別で異なる育て方をしていないと言える。

幼児の自己制御機能及び社会的行動

幼児の制御機能についても、養育態度と同様に29項目からなる質問紙について因子分析を行った（主因子分析、バリマックス回転)。その結果、固有値１以上で５因子が抽出された。しかし、第３因子から第５因子までは、固有値が２以下であり、又、項目間の整合性がみられないため、固有値６以上で、２因子を抽出した。寄与率は52.2%であった。第１因子は13項目から構成され、友達にいじわるされたり、いやなことをいわれたとき、「やめて」といえるといった項目が含まれていたので「自己主張」と命名した。この因子の中に項目27が含まれていたが負荷量が0.3以下と低かった為因子から除外した。第２因子は14項目から構成され、遊

びのとき、自分の順番がくるまで待てるといった自分を抑制するような項目が含まれていたので「自己抑制」と命名した。第２因子において項目13が含まれていたが、負荷量が0.3以下であったため因子から除外した。次に、16項目からなる社会的行動の質問紙についても因子分析を行った(主因子分析、バリマックス回転)。その結果、３因子が抽出されたが、項目の内容を検討して、固有値４以上で２因子を抽出した。寄与率は60.6%であった。第１因子は８項目から構成され、友達の世話をするといった項目が含まれていたので「思いやり行動」と命名した。第２因子は８項目から構成され、友達をつねったり叩いたりするといった項目が含まれていたので「攻撃的行動」と命名した。これらの項目得点と負荷量はTable４，Table５に示してある。負荷量でマイナスがついているのは、逆転項目である（Table４，項目12)。Table６を見ると、自己主張は2.65で自己抑制は2.84（4点満点）で、自己抑制の方がわずかに高いが、両因

Table４　幼児の自己主張及び自己抑制

因子	項目	負荷量	得点（SD）	項　　目
1	07	.851	2.79（.95）	友達にいじわるされたり、いやなことをいわれたとき、「やめて」といえる
	17	.850	2.98（.99）	自分の番に、誰かが割り込んできたとき、「順番をぬかさないで」といえる
	08	.832	2.91（.96）	遊んでいるとき、ずるいことをした子に「だめ」といえる
	22	.828	2.83（.92）	はいりたい遊びに、自分から「いれて」といえる
	24	.826	2.85（.92）	自分のものをとられたとき「返して」といえる
	15	.818	2.74（.91）	自分の席に座っている子にどいて欲しいとき、「どいて」といえる
	06	.789	2.26（.90）	他の人と意見が違っていても、自分の意見をいう
	02	.780	2.68（.93）	いやなことは、はっきり「いや」という
	11	.767	2.55（1.06）	ひどい悪口をいわれたり、からかわれたとき怒る
	19	.737	2.03（.96）	進んで手を挙げて、発表する
	03	.716	2.81（.97）	してほしいこと、欲しいものをはっきりと大人に頼む
	29	.668	2.41（.99）	人に聞かれたら、はきはきこたえる
	12	-.642	2.60（1.00）	＊自分の思ったことを、みんなの前でなかなか口に出して言えない
2	26	.793	3.02（.78）	「後にしなさい」といわれれば、待てる
	10	.783	3.17（.82）	遊びのとき、自分の順番がくるまで待てる
	16	.731	3.13（.74）	自分の使いたい遊び道具を、かわりばんこに使える
	09	.730	2.89（.98）	「してはいけない」といわれたことはしない
	25	.727	2.56（.95）	おもしろくなくても、終わりまで黙って人の話を聞くことができる
	14	.722	3.10（.85）	人のものを勝手にさわったり、使ったりしない
	01	.714	2.72（.89）	先生や友達の話を終わりまで、しっかり聞く
	20	.699	2.70（1.01）	人が話しているとき、退屈するとよそ見をしたり手遊びをする
	04	.690	2.99（.84）	遊んでいるとき、きちんとルールを守れる
	23	.668	2.63（.89）	やりたくないことでも、やらないといけないときはやる
	21	.667	2.73（.76）	欲しいものがすぐ手に入らなくても、我慢できる
	18	.666	2.74（.93）	時間がかかっても最後まで頑張る
	28	.647	2.53（.85）	難しいことでも、あきらめずにやる
	05	.331	2.89（.82）	ちょっと、失敗したりうまくいかないと、すぐにあきらめる

＊は逆転項目である

Table 5　幼児の社会的行動の分析結果

因子	項目	負荷量	得点（SD）	項　　目
1	01	.905	3.31（1.28）	友達の世話をする
	06	.886	3.55（1.13）	友達が困っていたら助ける
	08	.876	3.45（1.36）	年下の子の面倒をみる
	07	.848	3.73（1.12）	友達が悲しんでいたりするとき、なぐさめる
	13	.823	3.61（1.05）	友達を励ましたり応援したりする
	02	.689	3.40（1.05）	生き物をかわいがる
	11	.566	2.66（ .86）	植物の世話をする
	15	.528	3.63（ .98）	自分の使っているオモチャを他の子に貸してあげる
2	10	.814	1.48（ .79）	友達をつねったり叩いたりする
	12	.811	1.70（1.01）	物を乱暴にあつかう
	05	.775	1.82（1.00）	いうことをきかない
	09	.766	1.41（ .81）	すぐ暴力をふるう
	03	.733	2.64（1.29）	友達とけんかする
	04	.732	1.97（1.28）	言葉づかいがあらい
	16	.697	1.21（ .61）	自分より弱い子をいじめる
	14	.675	1.36（ .84）	気に入らないことがあると暴れる

Table 6　幼児の制御機能及び社会的行動因子得点

因子名	得点（SD）	α係数
自己主張	2.65（.75）	.95
自己抑制	2.84（.59）	.91
思いやり行動	3.42（.87）	.90
攻撃的行動	1.70（.72）	.89

子ともそれほど高いとは言えない。Table 4の各項目得点を見ると、自己主張の項目で最も高いのは、項目17の2.98で「自分の番に誰かが割り込んで来た時、順番をぬかさないでと言える」という項目である。一方、自己抑制の方で最も高いのは、項目10の3.17で、「遊びのとき、自分の順番がくるまで待てる」という項目である。幼稚園生活の中で順番ということがかなりルールを学習する最初ではないかと考えられる。Table 6から、思いやり行動の得点は3.42と高く、攻撃的行動は1.70と低い。Table 5を見ると、自己主張の各項目は全体的に高いが、攻撃的行動においては項目間で差が大きい。特に、項目03「友達とけんかする」では2.64と最も高く、中には、最大の5と評価されている幼児もいる。

Table 7　幼児の制御機能及び社会的行動の因子間相関

社会的行動	自己主張	自己抑制	思いやり行動	攻撃的行動
1．自己主張			.550 ***	.262 ***
2．自己抑制			.389 ***	-.527 ***
3．思いやり行動				
4．攻撃的行動				

* p<.05　** p<.01　*** p<.001

これらの因子間に関係が見られるか相関分析を行った（Table 7）。Table 7に見られるように自己主張と自己抑制の間には関係は認められなかったが、思いやり行動や攻撃的行動との間に関係が認められた。自己主張は、思いやり行動、攻撃的行動共に正の相関が認められた。これらの結果は、自己主張が、どのような状況でなされるのかで異なることを示唆している。又、自己抑制と攻撃的行動とは負の関係が認められたことは、自分を抑制することができる幼児ほど仲間との喧嘩や乱暴はしない幼児だと考えられる。

年齢や性別で因子得点を見たのがFigure 8-Figure11である。これらの因子において年齢や性別で差があるかどうかを3（年齢）x 2（性別）による二要因分散分析を行った。有意差が認められた因子はさらにLSDによる多重比較を行った。その結果、「自己主張」因子に年齢の主効果が認められた（F（2,170）=5.85, p<.004）。多重比較の結果、年長

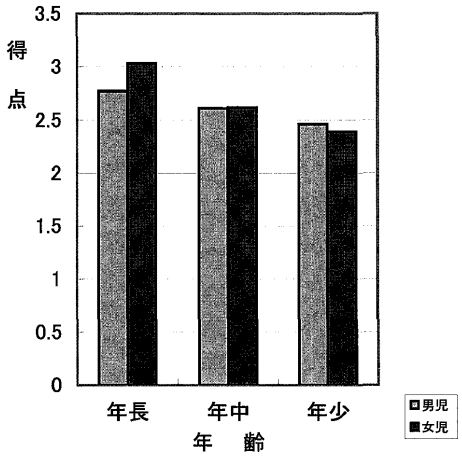

Figure 8　幼児の自己主張得点

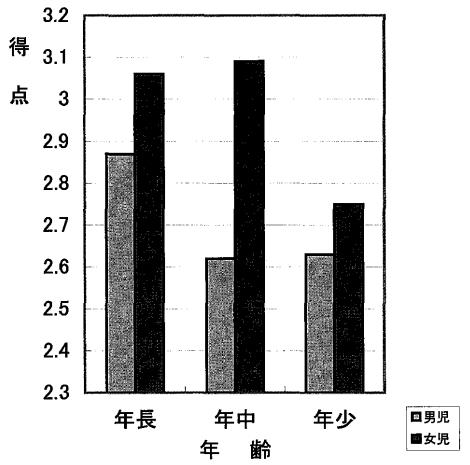

Figure 9　幼児の自己抑制得点

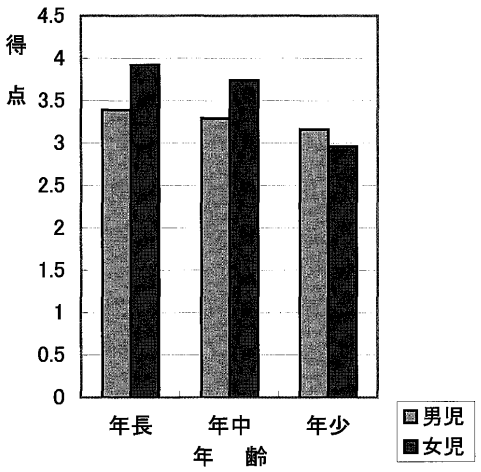

Figure10　幼児の思いやり行動得点

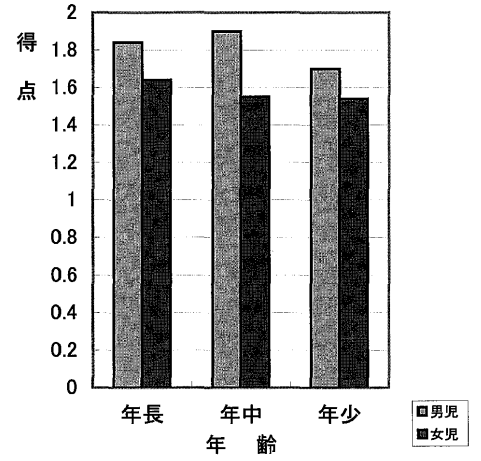

Figure11　幼児の攻撃的行動得点

は、年中、年少よりも得点が高かったが年中と年少の間には有意差は認められなかった（Figure 8．年長 2.89，年中 2.62，年少 2.42）。これらの得点から、自己主張は年中から年長にかけて大きく発達することがわかる。森下（2002）の研究結果とはやや異なる結果を示しているが、柏木の研究では（1988）、4歳4ヶ月から4歳10ヶ月の頃に大きく発達しており本研究と近い結果を出している。「自己抑制」因子においても年齢の主効果が認められた（$F(2,170)=3.04$, $p<.050$）。多重比較の結果、年長の得点は年少の得点より有意に高かった。しかし、年中と年長や年少との間には有意差は認められなかった（Figure 9．年長 2.96，年中 2.86，年少 2.70）。これらの得点を見ると、加齢に伴って得点が高くなっていることが分かる。年長と年少の間に有意差が認められたという結果は、自分を抑制するのは、年少から年長まで同じような割合で発達していくと考えられる。又、自己抑制因子は、性差も認められた（$F(1,170)=8.90$, $p<.003$）。女児の方が男児より得点が高かった（男児 2.71，女児 2.97）。女児の方が男児より我慢したりして自己を抑制していることが明らかになった。柏木の研究においても女児の方が自己抑制が高いという結果を出しており、柏木の研究を実証する結果となった。「思いやり行動」因子において、年齢の主効果が認められた（$F(2,170)=7.76$, $p<.001$）。多重比較の結果、年長の得点は年少の得点より有意に高く、年中の得点は年少の得点より有意に高かった。しかし、年長と年中の間には有意差は認められなかった（Figure10．年長 3.64，年中 3.51，年少 3.04）。思いやり行動も加齢と共に発達し特に年少から年中にかけて発達することが明らかになった。又「思いやり行動」因子は、性差も認められた（$F(1,170)=4.24$, $p<.041$）。女児の得点は男児の得点より高かった（男児 3.29，女児 3.54）。「攻撃的行動」因子において性の主効果が認められた（$F(1,170)=4.77$, $p<.030$）。男児の得点は女児の得点より高かった（Figure 11．男児 1.83，女児 1.57）。これらの結果は、思いやり行動は女児の方が高く、攻撃的行動は男児の方が高いという一般に言われていることを実証したと言える。いずれの因子にも交互作用は認められなかった。

母親の養育態度と幼児の自己制御機能及び社会的行動との関係

母親の養育態度と幼児の自己主張、自己抑制、思いやり行動、攻撃的行動との関係を相関係数で表したのがTable 8である。Table 8を見ると、殆どの因子間に相関は認められ

Table 8　母親の養育態度と幼児の制御機能及び社会的行動との関係

養育態度	自己主張	自己抑制	思いやり行動	攻撃的行動
受容／子ども中心主義				
統制／専制的				
一貫性のないしつけ				
服従的	-.202 **			
過保護	-.239 ***		-.176 *	
甘やかし	-.236 **			
放任				

* p<.05　** p<.01　*** p<.001

ない。幼児の自己主張において母親の服従的養育態度（r＝－.202, p＜.01)、過保護的養育態度（r＝－.239, p＜.001)、甘やかし養育態度（r＝－.236, p＜.01）においていずれも有意な負の相関が認めらた。又、過保護的養育態度と思いやり行動との間にも有意な負の相関が認められた(r＝－.176, p＜.05)。これらの結果から、母親の服従的、過保護、甘やかしといった養育態度は、幼児の自己主張や思いやり行動といったポシティブな行動とはマイナスの関係があることが明らかになった。男女別で養育態度と制御機能及び社会的行動との関係を見たが、関係があったのは、男児では、全体と同じように、自己主張と母親の服従的、過保護、甘やかしといった養育態度と負の相関が認められ、思いやり行動と過保護的養育態度と負の関係が認められた。女児においては、甘やかし養育態度と自己主張との間のみに有意な負の相関が認められた（r＝－.256, p＜.05)。本研究では、母親の養育態度と攻撃的行動との間には関係が認められなかったが、戸田の研究では（1999b)、母親の権威主義的養育態度、特に、体罰的な母親と向社会的行動とは負の関係が認められており（r＝－.14, p＜.05)、許容的養育態度、特に服従的養育態度は攻撃的行動と負の関係が認められている（r＝－.16, p＜.05）ことを報告しており、養育態度の測定尺度についてさらに検討していく必要があろう。

母親の養育態度の幼児の自己制御機能や社会的行動への影響について、従属変数を幼児の行動として（自己主張、自己抑制、思いやり行動、攻撃的行動)、予測変数を母の養育態度として重回帰分析（ステップワイズ法）を行ったところ、自己主張と思いやり行動に有意な関係が認められた（Table 9)。自己主張に影響を与えている養育態度は、第

Table 9　幼児の自己制御機能及び社会的行動に与える母親の養育態度

変　数		R	R2	β	F	p
従属変数	自己主張					
予測変数	過保護	.239	.052	-.239	10.55	..001
	甘やかし	.323	.094	-..218	10.10	.003
従属変数	思いやり行動					
予測変数	過保護	.176	.025	-.176	5.57	.019

５因子の過保護型と甘やかし型で共にマイナスの影響であった。又、思いやり行動に影響を与えている養育態度は、過保護型であり、マイナスの影響が見られた。他の養育態度は幼児の自己制御機能や社会的行動には影響を与えていなかった。これらの結果から、幼児行動に影響を与えているのは、母親が子どもに過保護であったり、甘やかす態度であることが明らかになった。最近、キレる子やいじめや不登校といったことが社会的な問題となっていることから、さらに親の養育態度と子どもの社会的行動との関係を小学生を対象にするなど継続して検討していく必要があろう。

引用文献

Baumrind, D. 1966 Effects of authoritative parental control on child behavior. Child Development, 7, 888-907

Baumrind, D. 1991 Effective parenting during the early adolescent transition. In P. A. Cowan & M. Hetherington(Eds.)Hillsdale NJ: Lawrence Erbaum Associates.

Eigenberg, N. & Fabes, R.A. 1998 Prosocial development. In N. Eisenberg (Ed.) Handbook of Child Psychology, Vol3 (pp.701-778) . New York: John Wiley & Sons.

Belsky, J. 1984 The detarminants of parenting: A process model. Child Development, 55, 85-96.

Grusec, J.E. & Goodnow, J.J. 1994 Impact of parental discipline methods on the child's internalization of values: A reconceptualization of current points of view. Developmental Psychology, 30, 4-19.

Kopp, C. 1982 Antecedents of self-regulation: A developmental perspective. Developmental Psychology, 18, 199-214.

小嶋秀夫　1969　親の行動の質問紙の項目水準におけるバッテリー間因子分析　金沢大学教育学部紀要, 18, 55-70.

Ladd, G.W., & Sieur, K.D. 1995 Parents' and children's peer relationships. In M.Bornstein (ED.), Handbook of parenting, Vol.4, Lawrence ¥erlbaum:N.J. (pp.377-409)

Lewis, C. 1981 The effcts of parental firm control : A reinterpritation of findings. Psychological Bulletin, 90, 547-563.

柏木恵子　1983　子どもの「自己」の発達　東京大学出版会

柏木恵子　1988　幼児期における「自己」の発達－行動の自己制御機能を中心に－. 東京大学出版会

Lamborn, S.D., Mounts, N.S., Steinberg, J., & Dornbusch, S.M. 1991 Patterns of competence and adjustment among adolescents from authoritative, authoritarian, indulgent, and neglectful families. Child Development, 62, 1049-1065.

宮城音弥　1960　性格　岩波新書

森下正康　1998　幼児期の母子関係が子どもの思いやりにおよぼす影響　和歌山大学教育学部紀要, 教育科学編, 48, 1-14.

森下正康　2002　幼児期の自己統制機能の発達(4)－園と過程における縦断的研究－　和歌山大学教育学部紀要, 教育科学編, 52, 1-12.

森下正康　2003　幼児期の自己統制機能の発達(6)－保育の特徴と子どもの行動特徴－　和歌山大学教育学部紀要,

教育科学編，53，23-38.

Putallaz，M.，& Heflin，A.H. 1990 Mother-child interaction In S.R. Asher & J.D.Coie (Eds.) Peer Rejection in Childhood. Cambridge University Press

山崎晃・中澤潤　監訳　子どもと仲間の心理学－友達を拒否するこころ－　北大路書房　1996

Robinson，C.C.，Mandieco,B.，Olson，S.，& Hart，C. 1995 Authoritative，authoritarian，and pammisive parenting practices: Development a new measure. Psychological Reports，77，819-830.

Russell，A.，& Russell，G. 1996 Positive parenting and boys' and girls' misbehavior during a home observation. International Journal of Behavioral Devlopment，19，292-307.

Schaefer，E.S. 1965 Children's reports of parental behavior: An inventory. Child Development，36，413-424.

Steinberg，L.，Elmer，J.，& Mounts，N. 1989 Authoritative parenting，psychosocial maturity，and academic success among adolescents. Child Development，60，1424-1436.

鈴木眞雄・松田せい・永田忠夫・植村勝彦　1985　子どものパーソナリティ発達に影響を及ぼす養育態度・家族環境・社会的ストレスに関する測定尺度構成　愛知教育大学研　究報告書，教育科学編，34，139-152

戸田須恵子　1998a　母親の養育スタイルと子どもの攻撃的行動に関する研究　北海道教育大学紀要，第一部(C)，48，49-62

戸田須恵子 1998b 父親の養育スタイルと子どもの攻撃的行動に関する研究．北海道教育大学紀要，教育科学編，49，63-78.

戸田須恵子　1999a　幼児の引っ込み思案行動及び気質と父親の養育スタイルに関する研究．北海道教育大学紀要，教育科学編，49，23-35.

戸田須恵子　1999b　幼児の仲間関係に影響を及ぼす親の諸要因に関する研究　平成８年度・平成９年度科学研究補助金研究成果報告書